

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポ幢ケ谷九〇四 電話(03)337714649

FAX(03)329915367

振替 東京0158431 労金 東京労金本店No1154163

購読料 月額500円 6カ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言■

「改憲包囲網」を打ち破る

山花社会党執行部の課題

政界再編の見取図

書記長人事で派閥の画策と混乱

大衆闘争路線を取り戻そう

社会党中央を憂える末端党員

「憲法改悪包囲網」打破への道

社会党「護憲派」の進路

#### 〈投稿〉

社会党信頼回復への道

本当の情勢をつかみ、何をすべきか見つけよう!

教育労働者の皆さんへ

悪人はいない、でもイザという時善人が悪人に

漱石の『いころ』について

# 旬刊 社会通信

NO. 529

一九九三年二月一日

一九九三年二月一日発行  
(毎月一日・二日・二日三回発行)

## ■ 巻頭言 ■

## 「改憲包囲網」を打ち破る

「山花社会党」執行部の課題

新潟県白根市の市長選で日本新党推せん候補（自民党员といわれる）が、現職の市長で自・社・公・民・連合推せんの候補を二千票もの大差で破り当選した。日本新党の細川代表は「『地方分権、分かりやすい政治』を標ぼうし、改革を訴えた竹内市長が誕生したことは、大変意義がある。わが党は都市部中心といわれてきたが、保守勢力の強いとされるところで理解されたことは、改革の波が広がってきたことではないか」（朝日、十八日付）と得意満面の談話を発表している。

日本新党は「民間政治臨調」の肝入で発足した政治団体だ（代表の細川氏、そして今では細川氏以上に人気を誇り、新党の行動隊長の感のある小池ゆり子氏はともに「民間政治臨調」の委員でもある）。細川がいうように日本新党は「分かりやすい政治」を体現できるのか。それで支持を集めたか。けっしてそうではなさそうだ。というのは、細川と佐川スキヤンダルとはけっして無縁でないとの報道が表には出ていないが、噂されているからだし、この日本新党は日本国憲法第九条についても、(1)憲法のことを真正面から考えることこそ、政治改革の具体的第一歩、(2)国威の発揚を志向し戦前の日本に回帰することをめざすかのように受け止められている従来の改憲論とは全く異なる新しい改憲論、(3)国連指揮下に行われる海外での治安維持活動にわが国が参画することを是認する条項を日本国憲法に盛り込む、と憲法九条改憲を党綱領で述べているからだ。

白根市長選結果の原因は、(1)過日の新潟知事選での自社相乗り、これへの反省をまったく欠いた今回の市長選での相乗りへの市民の反発、(2)連合への労働者、市民の拒否反応（ある労働専門紙が昨年十一月十二月に実施した調査、対象は連合傘下組合でも賃金引き上げ、労働基本権・人権、平和運動など国民運動、政治活動・選挙闘争については回答組合ですら「よくやっている」というのは、それぞれ一、四、二、二というわずかな組合の状況）、(3)佐川スキヤンダルにけじめをつけられぬ今の政治状況への不信、(4)幹部だけの選挙闘争と現在政治にあきたらぬ若者たちの行動力によるものだろう。

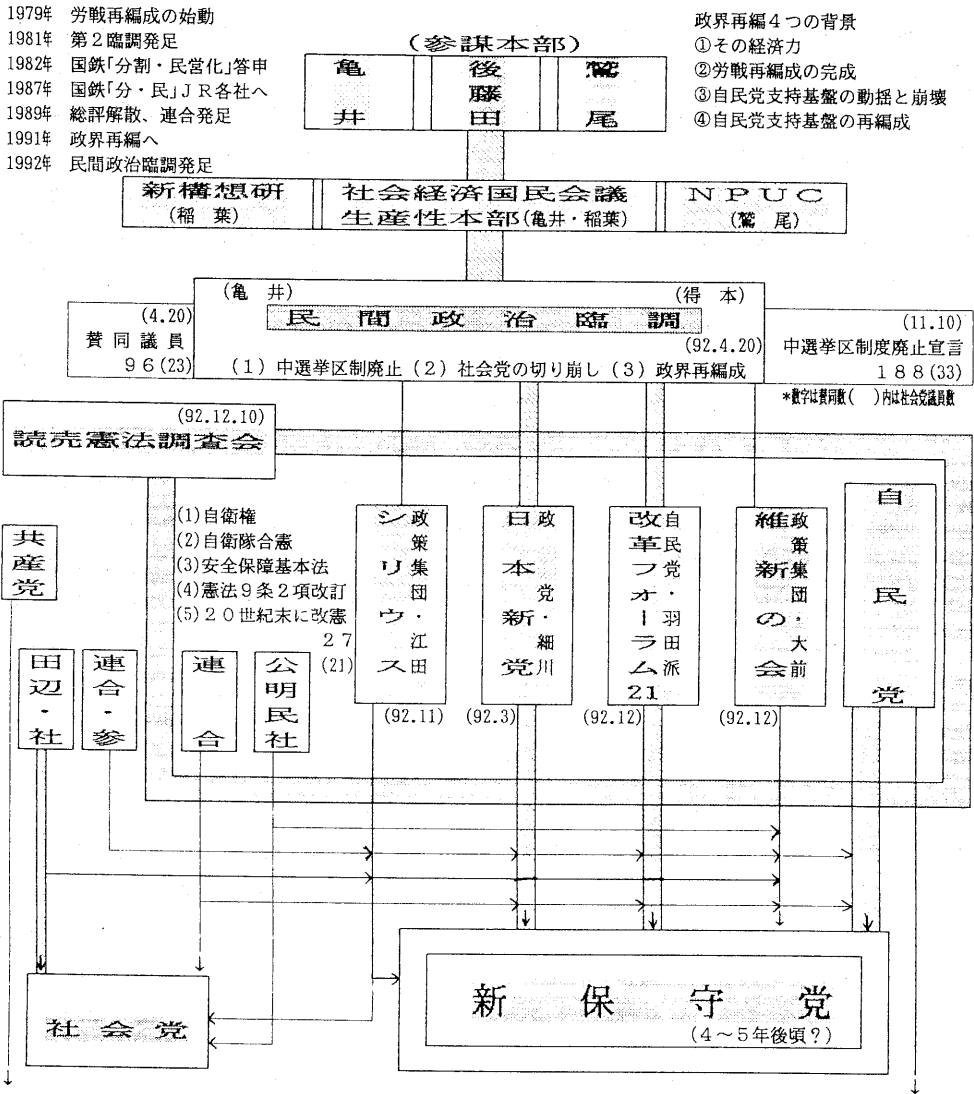
次頁の「政界再編の見取図」に明らかのように、現在の政治状況の特徴は「憲法改悪への包囲網」が形成されつつあることだ。「民間政治臨調」傘下の四組織（二つの政策集団、一つの自民党派閥、そして日本新党）は、既成組織の公明、民社、連合（連合参議院）、そして田辺・社会党も、昨年十二月十日に読売新聞の「憲法調査会」が発表した提言（憲法改悪への）の枠内にどっぷりとひたっている。

それに安心したからであろうか、自民派閥のボスたち、幹事長、それに風見鶏の中曽根が公然と「改憲」を主張し始めた。まさに「憲法体制」の危機である。このようなとき、社会党新委員長は「安全保障基本法」に関言しながら、「創憲」論を主張した。社会党解体に政治生命をかける連合会長は「創憲」というのはちょっとちがう。「自衛隊、安保条約、韓国問題にどう対応するのかよくわからない」（全電通旗開きでのあいさつ）と「機嫌ななめ」のようすが、われわれにとっても「よくわからない」というのが率直な気持ちだ。日本国憲法の理念と理想を国内はむろん国際的にも発展させると解したい。そして、「憲法九条改悪阻止」を明日の社会党臨時大会で全国民に訴えることを望む。

(一)

# 政界再編の見取図

佐川スキヤンダル—それでも自民党しが残らない!



(注1) 構図のポイント

- (1) 「革新・改革」対「守旧」
- (2) 冷戦後の国際政治への対応
- (3) 日本の国際的信頼獲得
- (4) 憲法体制の見直し
  - ① 自衛権承認から自衛隊容認
  - ② 安全保障基本法策定
  - ③ 改憲へ

(注2) 1930年代と現代

- (1) 近衛新党と日本新党-----細川は近衛の母方の孫
- (2) 昭和研究会と民間臨調-----既成政党は全部ダメ
- (3) 昭和恐慌そして「証券・金融恐慌」-----農村の疲弊と「弱者」切り捨て

(注3) 「民間政治臨調」の真の狙い

- (1) 社会党の食いぎり-----解党へ
- (2) 小選挙区制・改憲への誘導

(注4) 1993年の課題

- (1) 憲法改悪包囲網との対決憲法擁護国民戦線の構築
- (2) 行革の矛盾を大衆運動へ

# 書記長人事で派閥の画策と混乱

## 山花指名で政構研、事実上分解

——イメージチェンジ作戦では勝てない——

「政構研」の醜態が表面化

山花執行部の人事をめぐって、社会党内の右派派閥が蠢動して、山花社会党丸は早くも出鼻を挫かれた格好だ。ことにひどかったのは右派最大派閥の政構研の混乱ぶりである。まず山花氏を委員長に指名したことに対する田辺氏への反発が強いということが表面化した。「山花委員長では党改革ができない」（連合山岸会長など）というのが表の理由だが、実際は「政構研から出すべき委員長を他派閥から指名した」という派閥根性丸出しの反発であった。ことに基本政策の根本的転換をめざす久保亘、日野市朗、武藤山治の各氏に加えて「ニューウェーブ」や「シリウス」などの連中は委員長選挙に候補を立てようと一時画策したくらいである。

山花氏は田辺氏の意向を受けて「世代交代」を掲げ、新執行部づくりに着手した。そして「四〇〜五〇代を中心に新執行部を形成したい」ということで書記長に伊藤忠治氏（前副書記長、全電通・三重出身）を考え、田辺氏は全電通労組への根回しに動いた。しかし、これは失敗であった。政構研からまずクレームがついた。「政構研に相談なく頭越しに人事をやっている」というもので、政構研ははじめ各派が連日役員会を開き、「（各派の）『事務局長を窓口にして進めるはずの新書記長人事が、実際は田辺氏と山花氏によって進められ、さらにその側近である小林中執と関山企画局長がかかわるといふ四重構造になっている』と非難。『このまま四重構造を維持し続けるならば、独自の書記長候補の擁立も辞さない』（読売・十三日）という派閥むき出しの動きになった。

そして社会党の国会議員の四大派閥（政構研、水曜会、社会民主主義フォーラム、新しい社会党を創る会）の各事務局長は一月十三日夕会合し、自分たちで新人事の「調整を進めることを申し合わせた」（朝日・十四日）という。この派閥の事務局長等の言動には驚く。たいした力もないのに社会党の人事を派閥を背景に牛耳ろうというのだからひどい。

もともと伊藤書記長案は山花氏の出した「アテ馬」であったといわれており、伊藤氏は出身労組の全電通でも評価が低いうえ、新党を考えている全電通は、これで山花執行部に協力させられてはかなわんというところで伊藤書記長案に反対した。一月七日に田辺誠（委員長）、山花貞夫（新委員長）、小林恒人（田辺側近）、関山信之（山花側近）の各氏がひそかに会合し、人事構想がつくられた。事実上はいわれているように「田辺院政」であるといえよう。

政構研は力のない日野・小岩井ラインが幹部会などで盛んに田辺や山花批判を繰り返しているが、内部はバラバラである。指導者、まとめ役がないのである。書記長候補へ三人も名が出て、実際は分裂していると同じである。山花氏側（創る会）も政構研のこの現状を利用して赤松広隆氏（四十四歳、日通労組出身、衆院愛知六区）を一本釣りで書記長

に指名したのである。政構研内は佐藤観樹氏（衆院愛知三区、五十歳）が武藤山治前政構研会長等と県本部の推せんで書記長に立候補を表明、「選挙活動」に入っていた。さらに調整役のはずの小岩井清氏（政構研事務局長、衆院千葉四区、五十七歳）が自ら名乗りを上げるという思い上がりぶりである。加えて久保亘氏（参院鹿児島選挙区、六十四歳）が政構研の一部と「ニューウェーブ」や「シリウス」等に推されて書記長への立候補を表明している。

山花新委員長が赤松氏を書記長に起用したことによって政構研内は一層混乱を深めるであろう。まず書記長候補に名乗りをあげた三人のうち佐藤、小岩井両氏は簡単に降りることでも中執のポストをねらっているが、問題は久保氏の立場である。同じ派閥の右翼の実力者であり、右派系労組の支持をえており、その進退がいずれになっても山花執行部との対立は複雑に深まるとみられる。政構研の当選回数が多い五十代六十代の議員の多くは、世代交代・若返り論に反発しており、ことに一回当選組の「シリウス」、「ニューウェーブ」など所属の議員の日頃の勝手な行動には怒りをもっており、この対立も激しくなる。いずれにせよ派閥も再編または解消の時期に入っていることは間違いない状況である。政構研は事実上分裂しており、解体・再編が早いとみられる。今度の山花人事はこれを促進したことになる。

### 山花新執行部の課題

社会党は路線・基本政策の右旋回によって財界・官僚・マスコミに迎合し続けたがそれでも党勢の拡大ができず、「政権の党へ」とは益々速くなる現状のなかで山花丸は船出をすることになった。社会党と共に勤労国民の生活と権利を守るべき労働運動の多数派幹部はいまや日本独占の意向を受けて、社会党の解体＝保守二党論を唱え、具体的にも動き始めている。社会党十数万の党員は今までの国会議員と中央執行部の言動に大きな不信感をもっており、そこから党員に無気力感と革新の意識の低下をもたらしている。

山花執行部はまさに党の危機の真只中に成立したわけである。山花執行部は今、何をなすべきか。

- (1) 若返りとか、新しい言葉「創憲」とか、イメージチェンジで党勢の拡大をはかろうとしているが、それはダメである。もともと国民にわかる言葉で、例えば日本社会に憲法の完全実施をめざすために、自衛隊の軍縮にこそ力を入れるべきで、そのプログラムを明確にすべきである。党改革というのであれば、議員の質と行動力をどう高めるかである（若い議員でもだらしのないのが多い）。党内民主主義をどうとりもどすかである。国会議員の定年制（七十歳）は守るべきである。今の選挙対策本部のように、定年制を破ったり、五人区で一名だけの公認とはなさない。複数をさせる努力を一段と高めるべきである（何が政権党へか）。
- (2) 社会党は護憲の党であり、勤労国民の党であることを明確にし、大資本とその政府自民党とたたかう政党の基本をゆるぎないものにすべきである。改憲（解釈改憲も含めて）をめざす「シリウス」などへ所属する国会議員を甘やかしてはならない。その対処を厳格にすべきである。大衆運動を重視せよ。
- (3) 「佐川疑獄」の追及も国会内だけにとどまらず、大衆運動としての活動を結合させ

て妥協なきたたかひを行うべきである。政治改革Ⅱ小選挙区制、ではない。「企業献金の禁止」、「金集めパーティーの禁止」、「全ての選挙の公営化（選挙に金がいらぬ、かからぬ制度）」などに真剣であるべきだ。

(4) 「国対政治」をやめるためには、国会改革が必要である。委員会の公開、委員相互の討論、調査・現地視察（住民との話し合い）などの拡充、などをはかるべきである。

(5) 開かれた党、民主的な党というならば各派閥を解散させるべきであり、派閥に入らないことを議員公認の基準にすべきである。（社会通信政権研究班、一月十八日記）

## 大衆闘争路線を取り戻そう

——社会党中央を憂える末端黨員——

中央委員会を終わって二日後の田辺委員長の辞意表明は、如何にも唐突のように見えたが、実はかなり入念な計算によって伏線が引かれていたようだ。中央委員会に出席した人かには「辞任のニュアンスを感じたので、しつこく迫らなかつた」と、後になって話している。そして辞任表明の記者会見で、田辺氏は「世代交代」を理由として強調し、金丸氏との「兄弟仁義」についての新聞記者の質問に「関係ない」と声を荒げたというが、翌朝の朝日新聞は一面トップ見出しに大きく「背景に金丸問題」と報道した。それが国民一般の率直な受け止め方ではなかつた。

以前から党の下部では田辺委員長に辞任を求める声が強く、総支部で辞任要求決議を中央本部に送り付けたところもあった。その声を集約すれば「田辺委員長では選挙は闘えない」ということになったのである。四十四歳のクリントン大統領の登場を「世代交代は国際的流れ」として辞任の口実にしたのは、本当の理由を隠す煙幕でしかなかつた。

### 大衆を疎外した田辺路線

自民党は、屋台骨だつた竹下派が分裂し、全身疲労骨折症状は覆うべくもない。宮沢政権はそれでもなお派閥連合の古い党体制を守り、政権維持に必死だが、国民はもう何も期待していない。年末の支持率は一〇%台に落ち、不支持率は八〇%を超えている。国民の政治不信は極まってきた。すべて自民党政治の腐敗の責任と言って済むことだろうか。

政治不信の直接原因はロッキード、リクルート、東京佐川と続いた金権政治の腐敗が極点に達したことにあり、その一つ奥に自民党の派閥政治があるというのは常識。さらにもう一つ奥にあったものを見逃してはならない。国対政治である。国会運営を演出するのは議会運営委員会である。与野党の駆け引きはいろいろ手練手管を要するところだろうが、その手練手管を公開の場から隠して、別室でひそかに妥協点をつくり上げて来たのが国対政治だ。そのため、国会審議は形骸化し、与野党が対立点をどう擦り合わせて妥協点に到達したかの政治の決定プロセスが隠されてしまったから、国民の政治不信が拡がったのは当然。田辺氏に辞任を迫つた下部黨員が一番迫及したかつたのは、この国対政治への田辺氏の共犯者責任だつたと思う。

国対政治を支配したのが「永田町の論理」。大衆を疎外した「永田町の論理」が大衆の

目に不可解だったのは当然。社会党がこの「永田町の論理」の中に首を深く突っ込むようになったのは七〇年代半からだ。そのころ社会党は、党大会の代議員数はそのままに、国会議員に優先的に代議員資格を認めて地域総支部選出代議員を削減している。その結果、最高決議機関である大会に国会議員を軸とする党中央が占める比重は増大し、党中央は政治活動の重点を国会活動に置いて政府・自民党との妥協を優先し、党の大衆運動離れが進んだ。大衆路線を守ろうとする左派を中央からできる限り閉め出した右派の面々が国鉄労働組合を政府・自民党の攻撃から守るのではなく、組合に当局との妥協を強要したり、総評解体、労働戦線再編を積極的に支持したのは、その例証である。総評が解体した今日、求心点を失った平和運動その他の大衆運動は地域に分散を余儀なくされているが、大衆的エネルギーは全国各地で運動の火を消してはおらず、それが地域の総支部から田辺批判の声を上げさせたのである。田辺批判は、単なる田辺個人への批判に止どまらず、七〇年代以来の党の右翼偏向全体の総括を要求しているのである。

#### 「世界は変わる、党も変わる」

政党支持率を見ると、自民党支持率は三〇%を割ったが、社会党支持率は一五%台に低迷して全く伸びていない。支持政党なしが五二%を超え、自民党がダメなら社会党ということになっていない。社会党が政権担当能力を国民に認めて貰えるように古い体質を改めべきだと、特に若い一年生国会議員は言っているようだが、何処をどう改めると言っているのが問題である。

ソ連は解体し、その衛星諸国の社会主義体制は崩壊した。対決に代わって対話と協力の新しい時代が始まった。冷戦時代の政治姿勢はすべからず改めるべきだ、と彼らは言う。そして彼らが言っているのが、「アメリカとの和解、天皇制との和解、安保・自衛隊との和解、韓国との和解、大企業との和解」である。言い換えれば、アメリカ帝国主義反対派止め、差別の根源である天皇制はそのままに、安保・自衛隊と日韓癒着を容認し、労使協調を促進するという他に他ならない。さらに彼らが主張しているのが党名変更。党名変更は正に路線変更の同義語なのである。

筆者は古い黨員であり、古い人間かも知れない。しかし、労働者階級の思想である社会主義の旗を掲げ、基本的人権の尊重、民主主義の発展を目指し、平和主義を貫き、反戦・平和、反独占・反帝、反差別的闘いを本領とする社会党を愛し、誇りとしてきた。党名変更を絶対に認めることはできない。その理由は簡単である。世界は変わったと彼らは強調するが、世界を征服したという資本主義の本質はいささかも変わっていないからである。

#### 顕在化する資本主義の矛盾

フクヤマなどという人が「社会主義は終わった」と言い、ある人は「社会主義体制の歴史的使命は終わった」と言っているが、アジアでは社会主義は独自の発展の道を進んでいないではないか。中国や朝鮮を見るがいい。ソ連や東欧と同じ失敗の轍を踏まないようにそれぞれ独自の社会主義路線を歩んでいるではないか。社会主義は資本主義の搾取と差別から人間を解放する労働者階級の思想だが、社会主義体制には決まったパターンがあるわけではなく、国や地域によって多様に異なる歴史的、地理的、文化的、社会的諸条件に従っ



でパターンも違ってくる。ソ連型社会主義体制の実験は失敗したかも知れないが、世界の資本主義の現状ではますます社会主義の可能性が高まっている。

資本主義世界は同時不況に落ち込み、最後まで不況知らずだった日本も出口の見えない複合不況に落ち込んでいる。世界資本主義体制の中心部七か国の毎年のサミット会議だけでは間に合わず、G7、G10と世界的な調整をしなければならぬほど経済が国際化してボーダレス（国境のない）時代と言われる今日、不況の規模もかつてなく大きくなっている。加えてコメコンが崩壊して破産寸前の旧コメコン市場を抱え込んだのだから、容易でない。

開発途上国と先進国、富めるものと貧しいものの格差は果てしなく拡大し、第三世界では飢餓地獄に苦しむ国が増え、超大国アメリカでは失業者とホームレスが街に溢れ、経済的差別と人種差別が重なって都市暴動が起き、先進資本主義国の固まっている西欧でも不況と社会不安が外国人排斥暴動を誘発し、市場経済導入の幻想に酔っていたソ連・東欧諸国でも経済改革の躓きが民族紛争を深刻にしている。資本主義の看板である市場経済は競争原理で経済発展を加速する反面、搾取は激化し、不平等、不正義、差別は拡大し、紛争のタネは増えて衝突は激化する一方である。

### 本当の現実

その増大する紛争を解決すると称して、国連を使った武力行使が流行っている。紛争の原因を解決するのではなく、矛盾だらけの現在の国際秩序を維持するために大国が中心になって紛争地域に軍隊を送り込んでいるのが国際政治の現状である。「平和は武力で示すもの」と言ったのはレーガンだった。彼は宇宙戦争計画まで作って世界を力でねじ伏せようとした。そのツケは周知の通りアメリカ経済の赤字漬けの破綻である。にもかかわらず、アメリカは性懲りもなく「力による平和」政策を信奉し、国連にこれを押し付け、国連では「対話と協力による平和」は「非現実的理想論」扱いされ、日本はそこにもますます深入りして海外派兵を国際貢献だといひ、常任理事国の仲間入りを画策している。

憂えるべき情勢である。が、右派の面々は「力による平和」政策のアメリカと和解し、安保・自衛隊を容認して日本の再軍備を進めることが現実的だと言う。現実的と言うのは現実をそのまま容認することではない。先進国の論理をカネと武器の力で開発途上国に押し付ける「力による平和」政策は限界にきているのである。それが本当の現実なのだ。その現実を目をふさぎ、PKFであれ、多国籍軍であれ、武力行使に荷担することが国際貢献だと強弁することは非現実的なのではない。

世界の政治地図は大きく変わってきた。しかし、資本主義の矛盾は変わるところか地球規模で激化し、人間の住める唯一の星、地球さえ破壊しかねなくなっている。地球を救い、人類を破滅から守る道は何か。暴力によるのではなく、理性と知性を發揮して、世界的合意の達成を目指す以外にはないのではなからうか。安易にアメリカ帝国主義と和解し、日本の再軍備を容認し、資本主義中心国の意のままになっている国連を金料玉条に「力による平和」政策に荷担することを国際貢献と言ひ繕ひ、資本主義の矛盾との闘いを放棄して矛盾激化を促進する労使協調の方向に党の路線を転換しようというのは、党の伝統的路線の放棄であり、党をハイジャックするものである。



## 社会党を大衆に密着したものに

政治は手詰まり、経済は行き詰まり、袋小路追込まれた支配階級は猫も杓子も改革だ、変革だと大合唱。自民党の中にも「変化」「改革」を言うグループが現れ、社会党の国会議員の中にこれと気脈を通ずる者があり、さらに一部社会党国会議員も参加している民間臨調や平成維新の会といったグループの動きがあり、政界再編成の噂もだんだん具体化しそうだと言う。しかし、右翼・支配階級側の人間が言う「改革」は常に「上からの改革」であり、現行支配体制の骨組み強化のための「改革」に過ぎず、搾取と差別を強いられている大衆の権利と利益を守るものだった試しはない。そもそも維新などという言葉は、王政復古、天皇新政に使われた言葉である。平成維新などという言葉は昭和維新を唱えた二・二六事件の青年将校あるいは産業報国会の亡霊でも出てきそうな恐怖感を誘う。

社会党を愛し、社会党を守りたいと願うものは、いま流行の「改革」の本質を正しく見抜かなければならない。間違った現実と妥協することが党改革ではない。平和、人権、環境を守るために何をなすべきかを真剣に考えて闘うのが真の改革である。決して難しいことではない。現在の政治、経済、社会の矛盾に直面して、大衆はさまざまな要求を強めているのである。その大衆の要求を大衆の中から政治要求にまとめ上げ、その要求実現のために広く大衆を結集した運動をつくり上げることが緊要である。職場・地域で平和、人権、環境を守るために闘っている仲間こそ社会党の基盤であり、大黒柱である。職場・地域の闘いを全国的ネットワークで結び、社会党を大衆に密着したものにしなければ、国民大衆の支持を取り戻し、広げることはできないであろう。

(若)

## (十八頁よりつづく)

そして親友のKが、先生に娘さんへの恋を打ちあげたのです。ですから先生の心は乱れました。そして先生は、下宿の未亡人に、娘さんを下さいと申し入れました。もちろんさんたんに、よろしいとの返事でした。しかし問題は、先生が、親友のKをうら切って、Kを恋のためにだしぬいたことなのです。ところが思ってもみなかったことがおきたのです。ある日突然に親友のKが自殺してしまつたのです。親友のKの恋が、親友にだしぬかれたための思いあまって自殺したとしか考えられないのです。

ですから、親友のKの自殺によつて、先生は世の中の人間は、信用できない、自分だけが信用できる生き方の信念が、もろくもくずれ去つたのです。

おしまいに、漱石の作品『ころ』でいちばん、言いたかったことは、世の中に、鋳型に入れたような悪人はいないのです。いざという時に善人が、悪人に変心することが恐ろしいことなのです。以上は、私が漱石の作品の中から、いちばん人生の教訓と、感銘を受けた作品です。私は、社会通信の読者が、一人でも多く、文学の面白さと、社会的判断力について、関心をもって、いただければと思って、書いた次第です。

テレビばかり見ていると、人間が「バカ」? になってしまいます。東大を出ていても、社会的判断力のないいわゆる「バカ」な知識人が、いっぱいいます。社会通信の読者の皆さんくれぐれも、健康に気をつけて頑張ってください。

(富山 実)

## 「憲法改悪包囲網」打破への道

——社会党「護憲派」の進路——

### 急激な解党工作

「このままいったら私たちは社会党にいられるのでしょか」という切ない声をよく耳にする。ことほどさように、社会党への解党工作は急激である。

それは、新報が減部しているとか、党員の結集が悪くなったという党活動の停滞一般という次元や、かつてのような「左派」排除、協会排除という次元はとつくにこえた事態のように思える。

私は党都本部臨時大会に参加して、暗然たる想いをした者の一人である。労組大会も含めいろんな大会を傍聴してきたが、こんなひどい大会はみたことがない。大事な都議会議員選挙をひかえているにもかかわらず、都本部への不信は決定的となり、最低限のまとまりもこれでふきとんだ。おそらく執行部内でも相当数の人が「こんなことでいいのか」と内心思っているにちがいない。ただ確かなのは、一部の勢力はあきらかに党の団結などどうなるうとかまわれないという強い意志をもって大会に臨み、またその勢力の「無言の威圧」は、執行部内などに「モノいえば唇寒し」の雰囲気をつくり出したばかりか、国会議員八人の連名による要請すらふきとばすほどのものだったということである。

間接的か直接的かは別として、この勢力のバックは連合、社会党支持労組連の数労組であることはまちがいない。

都本部大会から三週間。私の所属する大田総支部大会が開かれた。一党員の立場からみて、この一年余、総支部は精いっぱいがんばっていた。反PKO闘争では労働組合、市民団体と連携し東京全体の運動にも寄与したし、参院選問題では独自候補擁立で意見具申した東京の数総支部の一つとして努力した。とりわけ書記長の小峰雄蔵氏は高齢もいとわず奮闘し、党員の声を都本部に伝える先頭にたったがために、都本部に「除名」処分を通告されまされたのは御承知の通りである。「除名」は党内の良心の努力によって事実上撤回された。問題の都本部臨時大会でも果敢に奮闘していた。

ところが、総支部大会では、小峰書記長をはじめとする過半数の執行委員に対し対立候補がたち、「数の力」で小峰書記長以下多数の執行委員が下野させられる事となった。総支部の諸行動ではまずお目にかかったことのない大量の労組党員が、何十万円とたまっていた党費をボンと支払い、会場をうめつくす空気のなかで、こうした不可解な事態がまかり通ってしまったのである。ここにも、都本部大会とまったく同質の「無言の圧力」を感じざるをえなかった。

### 実体は「護憲の党」の解体

「無言の圧力」は、いったい社会党をどうしようとしているのだろうか。

今日の社会党は社会主義政党とはいえない。しかし、反独占・民主主義擁護の共同戦線

党という客観的役割を果たしうる存在といつてよい。反PKO法闘争では、そのような役割をよく果たした。

他方日本独占資本は、もはや社会党から社会主義の牙をぬくだけでは満足できない段階に入った。労働者階級への搾取をいっそう強め、人権までの否定し、平和憲法にいよいよ手をかけねばならなくなったからである。護憲とか民主主義や人権を守れなどという社会党、反独占・民主主義擁護の共同戦線党たりうる社会党の皮をはぎ、肉をそぎ、寸断する必要に迫られたのである。だから、今日、党に加えられている攻撃を、七七年の党「改革」以降の、いわゆる社会民主主義化の延長線上にとらえては判断を誤ることになる。もしたんに社会民主主義化を徹底しようというのであれば、頑固なマルクス・レーニン主義者だけに矛先をむければよいはずだが、すくなくとも東京の党をみる限り、矛先はあきらかに「護憲」の立場にたつ全ての人びとにむけられている。攻撃はあきらかに、社会民主主義化の次元をこえて、「護憲の党」の解体へと突き進んでいるのである。

### 「護憲の党」の階級性

だが逆にいえば、たよりにならぬ社会党であっても抹殺してしまわねば、いつまた反PKO法闘争のような状態が再現するかわからぬほどに、日本独占資本主義の矛盾は深まっている。PKO法や自衛隊政策などの直接憲法にかかわるものから、ブルジョワ政治の化けの皮をはがす金権スキャンダルの続発、さらには国鉄闘争に集約される労働基本権、人権問題に至るまで、日本全土を民主主義の閉塞状態がおおっているのである。

だから、護憲の党を守ろうという訴えは、いよいよ客観性と大義をもつものとなっている。

これに反して社会党を別の方向にもつていこうとする人たちには何の理念もない。「無言の圧力」とは、議論はめんどうなので数の力でおしきつてしまえという姿勢のあらわれだろうが、同時に論ずべき内容を何ももっていないことも示している。時おり聞こえてくるものは「護憲の党では保守的だ」とか「政治改革のためには中選挙区制を廃止するしかない」といった類の、おどろくべき情緒的、非論理的なデマゴギーだけである。社会党の良き時代の、それなりに気骨ある「社会民主主義」を信念としていた右派とは全く異質なのである。

もともと政治的理念というものは、宙に浮いたものではなく、諸階級の対立関係のなかにその存立の根拠をもっている。「反独占・民主主義擁護」の統一戦線の形成をうながす客観的な条件を反映するのが、「護憲の党」という理念なのである。「生活者の党」などという一年ももつかわからぬ「流行語」とはわけがちがう。そして歴史的な存在意義のある理念のみが、人の心をとらえるのである。

### 「憲法を活かす東京の会」も発足

事実、東京でも「憲法を活かす東京の会」が発足し、多くのまじめな党員が結束を強めている。都本部大会でも、各総支部や代議員の様々な努力は、共通の護憲の信念でむすばれているように感じられた。昨年の都本部大会に比し大前進である。これを「護憲派」と

いう新「派閥」ができたなどと歪小化してうけとめてはならないと思う。政治の世界だから、様々な思惑や利害は常につきまものだということくらいは承知している。だが、「護憲の党を守る」という結束は、党内外からの大変な圧力を覚悟してでなければならぬ。なのであって、その大義からいっても、保身や派閥的利害というものを最小限におさえる性格のものであることはまちがいない。わが大田総支部でも、書記長以下多くの方が野に下らざるをえなくなったのは残念至極だが、彼らの努力によって、護憲の党を守るために何事かをなさねばならないということに多くの党員が気づき、決意を固めはじめている。何十年と党に献身してこられた方も多い。心強い限りである。

### 急務な「護憲の党」を守る全国的連携

とはいえ、すこしでも「お上」の意向に逆らうような総支部には「連合軍」が派遣されきついお灸をすえてあるくようなことになれば、事は容易ではない。

護憲の党を守ろうと思う党機関、党員が互に勇気づけあい連携できるような、かたまりが欲しい。国会議員は「憲法を活かす会」をつくっているが、これに呼応するような立場で党の県本部が連携してもらえれば一番心強いが、総支部が連合をくんだり、それもかなわぬところでは党員有志で「憲法を活かす会」的な勉強会をつくったり、要すれば「護憲の党を守る」多角的、重層的なネットワークができてほしい。このネットワークが、解党を阻む力になりうると思う。また、できるだけ広汎な労働組合、市民団体とも連携する工夫をこらすべきだろう。摩擦も生じるだろう。しかし憲法と社会党の危機を直視するにつれ、党員の多くは必ず気持を一つにするにちがいない。あせるわけではないが、いそがねばならない。もともとが一定の覚悟をして入党したような党員ならば、どんなに右傾化してもねばり強く党内で闘うこともできるだろう。しかし、護憲の党だから入党したのであって、それすらするようなら党に未練はない、という党員も決してすくなくない。とりわけ東京のように、森田問題をはじめ党員の気持を傷つけることばかりおきたところでは、党の活力は急速に減退している。役職にもついて、口八丁手八丁で、党がどこへむこうが、したたかに生きのびる術を心得ているような党員の感覚ではなく、もっとふつ々の党員の感覚を、党指導部も活動家も理解すべきなのだ。

我々は総評解散の愚をくりかえしてはならないと思う。あの時も、職場組合員・活動家の手の届かぬところで事は急進展してしまった。心ある勢力、組合員はバラバラにされてまとまった力を発揮しえなかった。労研センターはそれなりの警鐘を乱打したが、活動家も「総評が解散しても反合闘争は続ける」といったような視野の狭さを脱しえなかった。組合員は、総評を守ろうという情熱をわかす前に、すっかりイヤ気がさしてしまった。労働組合の場合は組織の性格上、連合にいったからといって脱退するという問題に直結するわけではない。しかし政党の場合はそういうわけにはいかない。社会党をめぐる情勢は、総評解散の時とは比較にならぬほどの深刻な選択を、党員一人ひとりにつきつけかねない。あの時の労研センターのような役割を果たす、党内のかたまりを、どう形成するか。われわれは、いやしくとも政党员なのだから。それぞれの立場で創意工夫をこらし具体化するときだと思ふ。

(大田・一)

## ◆ 投稿 ◆

## 社会党信頼回復への道

昨年未いただいた投稿です。この後、田辺氏は辞任を表明。社会党をめぐる動きは新たな段階に入る。社会党新執行部の成立は一月一九日、社会党をめぐる状況が変わったからといって、投稿者の気持ちは変わらない。山花氏に社会党らしさの指導性を求めるため、この投稿をそのまま掲載する。

(編集部)

田辺委員長は、二度の選挙の敗北の責任をとって、即刻、辞任すべきである。一度目は書記長時代の敗北、二度目は先の参議院選挙である。しかも、先の参議院選挙は、連合を最優先した党の方針の下に闘われ、国民から「分かりにくい」と総スカンを食らった、最も恥ずべき選挙であった。

有権者の二人に一人が、与野党の政治家に対して「何をやっているんだ」と抗議の意志表示をしていることを、委員長はどのようにお考えか。土井前委員長が積み上げてきた、我が党に対する大きな信頼を、彼は、無残にも一挙に吹き飛ばしたのである。連合の山岸会長とともに、彼の政治責任は、図り知れないほど重大である。

現在、社会党は竹下氏に対して、「政治責任をとって辞職を」と主張している。しかし、同時に、社会党自らが、しっかりと責任をとらないで、どうして、国民の信頼を得ることができようか。国民から信任されない委員長をいつまでも抱えた、いい加減な社会党と、いつまでも辞職しようとしえない、いい加減な竹下氏と、いっただれ程の違いがあるというのだろうか。巷では、田辺氏と金丸氏との関係が噂され、国鉄の分割民営化のときの、田辺氏や彼の側近と三塚氏との汚い関係が、公然と語られている。

国民はよく知っている。「田辺委員長のままでは聞えない。何とかしろ」というのが、全国津々浦々、真面目な党員と地方議員の声である。このことを、委員長はどのようにお考えか。

自らの言動に対して、責任を明確にする—このことが、社会党の信頼回復にとって、最も重要なことであり、朝早くから夜遅くまでヘトヘトになるまで働きながら、社会党の強化のためにどうすればいいか、考え続けてきた私の結論である。ここ数年間、支部の書記長（実際は党費の集金や会議の準備などの世話役）を担いながら、総支部、県本部の役員として、多くの党員や労働組合幹部と接してきた私の結論であり、下積みで苦労している多くの党員の叫びでもある。

## 国民の心にひびく訴えを

具体的に言おう。一九七七年の協会規則により、全野党路線を主張する人々を抑えて、社会党は、社公民路線を金科玉条の如く、実践してきた。その後、公明、民社は何をしてきたか。消費税のときは…PKOのときは…。九〇年の総選挙のときは、マスコミから「社公民だけでは過半数にならない。本気で政権をとる気があるのか」とバカにされ、大打撃を受けたのではないか。そして、今度は社民の総結集と言う。いやはや、次はどんなお題目を唱えるのだろうか。「ダメなものはダメ」と訴えるほうが、どれほど国民の心に響き、党の強化につながるか、これは実践済みであろう。

とにかく、我が社会党が誤りをくり返しているうちに、いつのまにか国民はシラケてしまったのだ。しかし、これは単なる誤りではない。政構研を中心とする人たちは、社会党

## ◆教育労働者の皆さんへ◆

## ◆本當の情勢をつかみ、何をすべきか見つけよう！◆

現在、最も大きな力で吹き荒れているのは、社会党つぶしと、闘う労働組合つぶしです。そして、「改革」への目論みです。しかも、非常に残念なことですがこれに乗っかる勢力が内部にあることも見逃すことは出来ません。

しかし、この事態は当然とも言えるのです。

## ◆帝国主義の時代

周知の通り、日本は明治に入って資本主義という経済システムを採用する国になりました。資本主義の根幹は搾取です。資本家が工場を建て、機械と資材（原料）を準備し、労働者を雇って働かせる。そして、重労働・低賃金で利潤を上げるといふ仕組みです。当初は自由競争が保たれ、先進資本主義国から技術を取り入れて急速に発展しました。封建時代の封建制度は取り払われ、一例えば居住・就職・結婚・通行―民主主義ははるかに前進しました。しかし、この民主主義（＝自由）は、資本家のためのもので、彼らが自由に資源・労働力を手に入れ、商品売りさばくために必要なものだったのです。しかし、時代を経るにつれ、競争に打ち勝った企業⇨独占資本（財閥）が存在するようになり、自由競争の時代から独占資本に中小零細企業がとてども太刀打ちできる時代ではなくなり、逆に、完全なピラミッド状態になって中小零細は下請け機関となりどんどん潰され（収奪）たり、独占を支える存在になります。部落差別等も、労働者の沈め石として最大限に利用されます。そして一部に巨万の富が集中し、対局に多数の貧困・失業・飢餓の状態があらわれます。

独占資本は、大量生産能力を持ち、国内市場（資源の獲保・安い労働力の獲保・商品を売りさばく場）では狭すぎ、どうしても海外へという衝動（帝国主義）を持ちます。こうして戦前の帝国主義戦争が次々と日本により引き起こされ、最終的には日本・ドイツ・イタリア対連合国、図式としては、ファシズム対反ファシズムの形で終戦を迎えたわけです。終戦後もなく、日本からファシズムや好戦的なものを無くすため、アメリカにより数々の民主化政策が成されます。教育も大きく変換しました。

しかし一九五〇年、朝鮮に社会主義国が樹立するや、たちまちに日本は反共の砦としての任務を背負わされ、資本主義国としての復活を急ぐことになりました。そして今日に至っていますが、日本の中心的企業は限られています。鉄鋼・自動車・電力・電機・交通運輸・通信etcは、各々十前後の企業に牛耳られています。しかも金融資本（巨大銀行）とも結び付いています。だから今は戦前のような商品ではなくお金という形態の資本が外国へ進出し、海外での日本企業が特に発展途上国の労働者を搾取したり、その国の自律（自立）を阻んでいます。

## 「総評・社会党ブロック」の歴史

さて、このような戦後の中で、必然的に労働者の不満や怒りが起こります。そしてそれが組織され、正しい方針・路線を生み、労働者の政党と結び付き、院内・院外の闘いを高めていきます。労働組合にとっては数と団結が武器ですから産業間の壁を乗り越えて団結しよう、未組織中小零細企業で働く仲間にも手を差しのべよう、一つの企業で発生した問題を地域の労働者の力で解決しよう、という意欲も出てきます。これが、「戦前は陸軍・戦後は総評」と言われたように、総評と社会党が連帯し、春闘を生み、地域に県評や地区労、オルグ団を持つようになったのです。特に、地域の最も弱いところに根ざし、全体の運動の底辺を支えてきた地県評、地区労は総評の財産といわれてきました。路線は、反独占・反自民を明確にし、反安保、反自衛隊、反原発、反日の丸・「君が代」はもろん護憲・非武装中立・反差別を高らかに掲げてきたのです。

これは社会党の党是であり、総評の路線であり、多くの労働者の心を掴んできたのです。しかも総評は労働者が最も人間らしく扱われないのは職場だから、職場闘争を大切な方針とし、闘う中で労働者が目覚め、敵を明らかにし、団結して攻撃をはねかえすという自らの立場（被支配者階級の一員）を自覚して闘う階級闘争を重視してきました。そしてその延長線上で、社会党と労働者・市民が強くかつ広く結集する反独占・反自民の国民統一路線を形成し、それに支えられた統一戦線政府を樹立し、はるかに平和で民主的な国を作るという目標を持っていました。そして社会党は、社会主義を目指す政党ですからこの延長線上で、武力を使わず平和裡に社会主義に移行するという平和革命の路線を打ち立てていたのです（社会党の綱領的文書Ⅱ『日本における社会主義への道』）。

## 「戦後政治の総決算」と労戦再編

そして、六〇年代、七〇年代は、六〇年の三池・安保闘争や国民春闘の高揚（日教組も七四年には全一ドストを打った）、国労の八日間に及ぶスト権ストに見られる如く、さらにこの力が東京・大阪・京都・沖縄・神奈川で革新知事を生み、なおもほろ儲けを続けた独占資本にとっては危機の状況を作ることができたのです。しかし、同時にこの資本家達の思いを政策として実行する政府自民党は、徹底して社会党つぶし、闘う組合つぶしを断行してきたのです。これが、中曽根の言った「戦後政治の総決算」であり、政策としての臨調行革路線だったのです。

八〇年代はこれが猛威を振いました。中身は徹底して金を出さないことです。そして、最も近道の人件費の削減Ⅱ首切りが始まったのです。勿論、活動家がやられました。最強の国鉄労働組合つぶしには国鉄の分割・民営化の手法で民間に移す際に根こそぎともいえる首切りがやられたのです。国鉄の赤字を解消するための清算事業団が作られ、ローカル線の廃止と共に、国鉄職員まで対象となったのです。権力による最大の人権侵害Ⅱ差別が強行されたのです。中曽根は国会答弁で、「一人も路頭に迷わせない」と約束しましたが完全に不履行です。現在一〇四七名の人々が闘争団を組織して闘っていますがJR当局は、それは以前の国鉄の問題」と知らんぷりです。けれども私達は、日本の労働運動の命運をか



けてなんとしても勝利しなければなりません。

このような時代背景の中で、日本の労働戦線を統一しようという動きが現れてきました。しかし、最大の問題は、階級闘争路線から労使協調路線への大転換でした。私達の所属していた総評は多くの注文を条件に統一に賛成することになりましたが、結局は完全な屈服でした。

#### 総評センター解散と私たち

こうして三年前の一九八九年一月、政界・財界から大歓迎されて「連合」が発足したのです。水と油の関係であった総評と同盟が他の新産別や中立労連などと一緒になったのです。新役員や重要ポストは、同盟関係者や同調者で占められました。平和や人権については、「連合」は安保・自衛隊・日の丸・「君が代」・原発等々については容認ですから、それを任務するため、総評センターを五年間残すことになりました。しかしそれも一年早めて、今年の三月でなくなりません。地県評や地区労もほとんど解体され、地区「連合」に変わろうとしています。総評の遺産は必ず継承することを条件にしていたにも拘らず、危機に傾いています。一方、日共系は「連合」に加盟せず、全労連を発足させました。だから労働組合のナショナルセンターは、「連合」と全労連の二つです。

しかし、この双方にいけない組合、総評の伝統を守り、まともな前進を願う組合があります。元総評の議長であった太田薫氏、市川誠氏、そして事務局長だった岩井章氏が中心になって、全国労働組合連絡協議会（全労協）を作りました。国労はこれに参加し、援助を受けながら闘っているのです。この全労協は、運動で行動を共にする共闘組織で、労働組合しか加入できません。またこれ以外に、岩井章氏が労働運動研究センター（労研センター）を発足させ、個人の加盟にも道を開きました。そして最近、最も緩やかな組織で、個人・グループ・団体（労働組合や市民組織）が加入できる『平和運動と地域共闘の前進をめざす全国連絡会』が出来ました。私達は、労研センター↓連絡会↓全労協への道を追求しなければなりません。私たちは確信をもってこの方向へ結果を提起します。

#### 労戦再編から政界再編へ

不況期を迎えた現在、各企業は、多量の首切りを予定しており、いつか各組合に通告されるでしょう。しかし、全会一致方式をとっている「連合」に闘う意志も能力もありません。国鉄闘争を支援するどころか「首を切れ」とJRに要求書を出すほど反労働者的な組合を含み、PKO・佐川疑惑についても全く何もできていません。このように、「連合」には未来がなく、労働者・国民の信頼を得られないことは明々白々の事実となっています。さて、冒頭に述べた社会党の骨抜き・解党攻撃は最終段階にきていると見ていいでしょう。政界再編が言われて久しく、社会党と民社党の合同や、自民党の一部（リベラル派）と野党の一部の組み合わせ等々の意見が出ていますが、共通しているのは、小選挙区制を導入して二大政党にするという考えです。今、この方向に急激に進んでいます。

二大政党の内容は、体制内二大政党、つまり保守二大政党をイメージすればよいと思います。PKO、佐川、新潟知事選の自民への相乗り、山花書記長の自公民の書記長・幹事長と夫妻同伴の外遊等々、意識的に党是を投げ捨てて、変質させようとしています。自民

党や民社党への擦り寄りを実に巧妙かつ計画的にやっています。その典型が田辺委員長の「党名変更」発言です。

最後に特筆すべきは、臨調行革を民間レベルでさらに発展させようとする動きです。去年の四月二十日、政治改革推進協議会（「民間政治臨調」）が結成されました。構成員は、財界四団体トップ＋「連合」新旧幹部＋マスコミ七五名＋自民党議員四三名＋社会党議員二六名＋公明党議員九名＋民社党議員六名＋社民連議員三名＋連合参議院八名となっています。特に政界再編について議論し、提言をまとめるとしています。労働組合で、この政界再編にコメントしていないのは、日教組と私鉄労連のみです。いかに事態が急速に進んでいるか分かります。

日教組の大場前委員長は九月、大分県竹田市で開かれた大会の退任の挨拶の中で、「護憲の国民戦線」を訴えましたが、それ以来日教組は、「連合」内で大変厳しい立場におかれているようです。

以上、結論は改憲に向けて進んでおり、私達は護憲か改憲か、護憲の勢力としてどの組織と共に歩むのか、またその方針を地域・職場でどう具体化して仲間を広げ、団結を強化するのか、下部からの反撃をどう作り上げていくのかだろうと思います。

（羽川健・奈良県教育労働運動研究会）

#### ◇ 私の本棚から ◇

### 悪人はいない、でもイザという時善人が悪人に

漱石の『こころ』について

社会通信の編集者から、「私の読んだ本」についての原稿依頼がありました。いっぱいあり過ぎて、選ぶのに困るくらいです。しかし今回は、夏目漱石の『こころ』について書きます。『こころ』のあら筋を要約しますと、小説の主人公である先生という人は、田舎の財産家の一人子で、二十歳の時に、両親に死なれて親なしになりました。

といって故郷で家をつぐ気にならなかったため、財産その他のことは、この人なら大丈夫と信頼できる叔父に任せて、東京の学校に出ていったのですが、ある日休暇に帰ってみると、意外にもこの叔父が、すっかり財産を横領していたことがわかりました。

それからの先生は、もう親類を含めて人間というものは、いっさい信用できないと思うようになりました。しかし、なんとか多少の財産を分けてもらって、それを金にかえて、東京での勉強をつけました。しかし、『こころ』の主人公の先生が、世の中の人間は、信用できないと絶望しました。実は人間を信用できないといいながら、ただひとつだけ例外がありました。いうまでもなく例外とは先生自身なのです。つまり世の中の人間は信用できない。自分だけは信用できることなのです。

叔父にだまかされた私は、世間の人間が、一切信用できなくなったのです。ところが先生は、未亡人と年頃の娘さんがいる家に下宿するようになり、家族同様の生活がはじまったのです。ところが、先生の親友Kが、家の経済的事情があつて、先生のところに下宿することになりました。そしてKが下宿先の一人娘とだんだん親しくなりました。先生の心は大変不安になったわけです。

（九頁につづく）